

ON AIR



1 ベニーの魂と〈サイレント・ラジオ〉

人は皆、未来に旅をする。

人生は旅なのだと言われ、父から教わった。現に父の人生の大半は船に乗って旅をすることに終始していた。船乗りであつたわけではない。客船の中でジャズを演奏する楽団の一員だつた。

クラリネットを吹いていた。

父がクラリネット奏者になつたのはベニー・グッドマンに憧れてあこがいたからで、旅を終えて次の旅に出るまでのあいだ、父は自分で淹いれたコーヒールを飲みながら、リビングにある古びたステレオ装置でベニー・グッドマンのレコードを聴いていた。おかげで、僕も物心ついたときからベニー・グッドマンが吹くクラリネットの音色に親しんでいた。

町のローカルFMラジオ局で深夜の番組を担当することが決まつたとき、オーブニングのテー

マ・ソングをベニー・グッドマンの曲にするかどうかでずいぶん迷った。あらためて父の遺したレコードを片っ端から聴いてみたが、どれもじっくりこない。それはおそらく、楽曲や演奏の問題ではなく、もういい加減、父から離れて物事を決めなかったからだろう。

「深夜一時から二時までの一時間番組です」

ディレクターのマナミさんが打ち合わせの席でおもむろに口を開いた。

「その一時間を曾我<sup>そが</sup>さんの好きなようにおしゃべりと音楽で埋めてください」

これまで、「声」の仕事を自分の天職であると思ってきた。テレビやラジオのナレーションや朗読が主で、ごく短いものだったが、ディスク・ジョッキーの経験もある。が、自分の名を冠した番組を持つのは初めてで、なおかつ、そこがローカルFMの気安さなのか、番組の名前から始まって、テーマ・ソングやジングルも自分で決め、そればかりか、全体の構成やトークの合間に流す音楽ま

で決めていいとのことだった。

「曾我さんの部屋に招かれて、曾我さんのおしゃべりを聞いて一緒に音楽を楽しむ。そんな番組にしたいんです」

僕自身、そんな番組を持ちたいと願っていた。

それまで自分の名前は隅の方に小さくクレジットされるだけだったが、番組の名前を〈サイレント・ラジオ〉にしたいとマナミさんに伝えると、後日、発表されたりリリースに、

〈ソガ・テツオのサイレント・ラジオ〉と記されていた。

限られた地域——ひとつの町に向けて放送されるものであるとはいえ、自分の名前がそこに刻まれたことで、ようやく父から解放されるのだと身も心も軽くなった。

オープニングのテーマ・ソングはトッド・ラングレンの「Be Nice To Me」に決めた。ひと昔前のこと、父の影響で聴いてきたジャズから離れ、町の中古屋でロックやポップスのレコードを買い

あさっていたときに出会った曲だ。レコード・ジャケットの写真はこちらに背を向けてピアノを弾いているトッド・ラングレンが青黒い空気の中で首吊り用のロープを首に巻いているというものだった。どうしてそんなジャケットに惹かれたのか分からない。が、あるいは、そのときの僕はそれまでの自分を葬ってしまいたかったのかもしれない。

レコード屋の店主に試聴をお願いすると、店主は黙ってひとつ頷いて、B面の三曲目——それが「Be Nice To Me」だった——に針をおろした。

これまた、どうしてなのかわからない。普通はA面の一曲目に針をおろすように思うが、店内に流れ出したのは賑やかな曲調のA面の一曲目ではなく、おだやかなゆったりとしたテンポのB面の三曲目だった。

いま思えば、それまでの自分を葬って次なる自分を模索していたのだから、盤を裏返したB面の三曲目に胸を打たれたのは、しかるべき偶然であったのかもしれない。

そんなふうにして、自分のラジオ番組が始まった。深夜の片隅に一人で座り、誰かに向けてというより、町に向かって、なるべく静かな声で語りかけた。賑やかな音楽で始めるのではなく、ともしれば眠気を誘うほどおだやかな曲から始め、その音楽が醸し出すトーンから外れないように声を保った。

夜ふかしの皆様、今晩は。曾我哲生<sup>てっお</sup>です。

FMニシジマがお送りします、ヘソガ・テツオのサイレント・ラジオ。

いかがお過ごしでしょうか。今夜も真夜中の一時間、気ままなおしゃべりと音楽をお楽しみいただけたら幸いです。

くつろいでお聴きください。

静かな声でお届けします——。

もともと、僕は静かな声を担当してきた。「静かな声」という言い方はおかしな表現だが、生ま

れ持って授かった声の質がどんな表現にふさわしいか、こちらの意思とは関係なく決められてしまう。映像作品においても、音だけが放送される番組においても、僕の声は静かなナレーションやおだやかな朗読、といったものをもとめられた。

町の名は西島町にしじまという。町を貫く川が海に出て行くところ——河口の町だ。

すぐ隣は大きな港町で、父が船に乗るようになったのも港町のライブハウスで演奏していたときにスカウトされたのがきっかけだった。つまり、僕が生を享うけていまま暮らしているこの町は、いつでも海につながっている町と言っている。

昔から変わらず、港町に比べて地味で静かで雑然としている。いや、昔から変わらないというのは正しくないかもしれない。この町で三十二年も暮らしていると、ふと、何かが消え去っているのに気づく。

モノレールがいつ廃止になったのか忘れてしまったが、町を横切る川と交差するように高いところ

ろを走っていた。いまはもう走っていない。走っていないけれど、そのレール——と言うのだろうか——と駅は廢墟はいきよと化して部分的に残されている。このところ、新調した眼鏡の度がうまく合わなかった。

「お前はどっちにしろ世の中をしつかり見ていないからね」

いつだったか、眼科医の友人に指摘された。

「度を合わせても、すっきり見えているのか大いに疑わしいよ」

そんなふうに言われたら返す言葉が見つからない。が、町を歩いて、どことなく風景が歪ゆがんで見えるのはいただけでない。

(でも、きっとそれでいいのだ)

もし、何ら申し分なく町を見渡せたとしても、たとえば、そこに映るのは、すでに廢墟となったモノレールの駅のひび割れと埃ほこりと残骸ざんがいだ。

子供の頃の景色はそうして風化してしまった。

だから、もういい。眼鏡の度が合わなくても。



(いいんだよね?)

(ええ、それでいいと思います)

とベニーの魂と話し合って決めたのだ。

ラジオに沈黙は禁物だが、番組の名を〈サイレント・ラジオ〉 〓 沈黙ラジオと名づけたのは、深夜の西島町に——この静かな河口の町に向かって語りかけるときに、

(沈黙や静けさを乱さないようにするのがいいですよ)

とベニーの魂が助言してくれたからだ。

ベニーは父が拾ってきた犬だった。言うまでもなく、彼の名前はベニー・グッドマンから頂いたもので、町の中のいちばん海に近いところ——紡績工場が撤去されたあとの大きな空き地に段ボール箱に入れられて捨てられていた。チヨコレート色の雑種犬で、父はそれを工場の空き地でクラリネットの練習をしているときに見つけたという。

「こいつはいい犬だ。いい魂を持つてる」

父の判断基準は明快だった。そこに魂があるかどうか。ただそれだけだ。ベニーにはそれがああり、父が愛用したクラリネットにもそれがあつた。

父が亡くなったあと、ベニーはすっかり妹の菜緒おに寄り添っていた。それはまあそうかもしれない。父は旅に出たきり、あらかた家にいなかったのだし、その間、ベニーを散歩に連れ出して世話をしていたのは妹だった。

だから、ベニーが死んでしまったとき、妹は父が亡くなったときより取り乱して三日分の記憶を失った。家を出たきり帰ってこないのので、探してみまわると、海に近い〈羽宮橋はねみや〉の欄干にもたれて川の流れを見つめていた。

僕とは言えば、ベニーの写真は片手で数えられるくらいしか保存していない。しかも、そのいづれもが、こちらに背を向けた後ろ姿をとらえたものだった。

にもかかわらず、何をどう間違えたのか、ベニ  
ーの魂は僕の中に入り込んだ。

この話は誰にもしたことがない。

話したところで理解を得られないし、理解を得  
たとしても、こちらが望むような正しい理解であ  
るとは思えない。

ずっと長いことそばにいた犬がいなくなつて、  
いなくなつた直後に、その魂だけが自分の中に入  
り込んできた。そんなはずはないと分かっている。  
しかも、ベニーの魂はときどき僕に話しかけてく  
るのだ。

そんなはずはない。

でも、起きていることをありのまま言えば、そ  
ういうことになる。

彼は僕が混乱したり、どうしていいか分からな  
くなつたとき、胸の真ん中あたりに少年のような  
声を響かせる。もちろん、その声は僕にしか聞こ  
えていない。

（ラジオを始めるなら、沈黙や静けさを乱さない  
ようにするのがいいですよ）

ベニーの魂は確かにそう言った。

僕もそう思っていた。

だから迷うことなく、〈サイレント・ラジオ〉  
という響きに思いを託した。

\*

ベニーが天に召された日のことはよく覚えてい  
る。ちよつとした事件があったからだ。

落ち着かない天気の日で、なにより川の増水が  
著しかった。夕方を過ぎてより激しさを増し、事  
件は夜になって起きるべくして起きた。詳細は知  
らない。ベニーが息を引き取ったことの方が我が  
家では一大事だったからだ。

でも、何が起きたのか、おおよそのところは知  
っている。少年が二人、川に流されてきた。それ  
自体は西島町の歴史において、さほどめずらしい  
ことではない。異例だったのは、彼らが結構な距  
離を流されてきたということと、二人とも無事で  
あったということだ。

実際には少年は三人いて、一人だけ行方不明になったという噂も耳にした。でも、僕は詳細を知らないので本当のところは分からない。

いずれにしても、二人の少年が救出されたちよ  
うどそのころ、ついにベニーの命が終わりを迎え、  
最後に大きなため息をついて、その口から魂が抜  
け出たように思えた。さらには、その抜け出た魂  
が僕の中に入り込んだと感じたのは、  
(もう少しここにいてもいいですか)

という声が胸の真ん中から聞こえたような気が  
したからだ。

(少しだけなら)

と僕は答えた。少しだけならいいけれど、いず  
れ魂は天に昇る必要がある——そう思っていた。

そのとき僕は十七歳だった。

十七歳なら、もう少しまともな考えを持つべき  
だったと思う。毅然とした態度で、

(それは駄目だよ)

と答えるべきだった。

結局、「少しだけ」が「あと少し」「もう少し」

と引きのばされていまに至り、十七歳だった自分はずでにその倍の年齢に近づいている。

それなのに、いまだに十七歳のときと変わらずハンバーガーを食べつづけているのはどうなんだろう？

〈バーガー・ログ〉はベニーではなく妹のアドバイスで始めたものだった。

「兄さんも、そろそろ名前と顔を覚えてもらうために何か始めた方がいいんじゃない？　なんだかんだ言っても人気商売なんだし」

それは自分でも気づいていた。「人気」という言葉には抵抗があったが、名が知れ渡れば仕事が増えるかもしれない、声だけではなく顔も見ていただいた方がより名前を覚えてもらえる。

「兄さんから仕事を取り除いたら何が残るの？」

「ハンバーガーかな」

自分でも驚くほどの速さで即答していた。

もし、ハンバーガーを食べたり研究したりする

ことで生計を立てられるのなら、とつくの昔にそうしていた。

「お金は入ってこないかもしれないけど、ハンバーガーを食べることで世の中の皆さんに名前を覚えてもらえるかもしれない」

「本当に？」

そんなうまい話があるだろうか。

「それが、あるのよ」

妹は僕よりも遙かにするすると話した。

「ブログを書くの。ヘソガ・テツオのアイ・ラブ・ハンバーガー」とかそんな感じでいいから。日本中のおいしいハンバーガーを食べ歩いて記録するの。写真を載せてね。ハンバーガーだけじゃなく、兄さんの顔もよ」

妹は母に似て、じつに鋭い直感を備えていた。実家に帰ると、母と妹が二人がかりで次々と直感をぶつけてくる。

「兄さんはいま、仕事に行き詰まってる。そうじゃない？」

「母さんは分かってるの。哲生はお父さんの呪縛じゆばくから抜け出したいんでしょ？」

「でも、どうしても抜け出せない」

「自分を変えたいけど変えられない」

「そして、そんな自分に嫌気がさしてる——」

どれも当たっていた。否定できない。

特に妹の言うことは無視できなかった。へアイ・ラブ・ハンバーガー」というのはさすがにどうかと思ったが、ハンバーガーを食べ歩いてブログを書くのはいかにも魅力的だった。「すぐにでも始めたい」と宣言し、妹がお膳立ぜんだてしてくれただおかげで、わずか一週間後には始めていた。

ブログの名はシンプルに〈バーガー・ログ〉と名付け、

「ブログじゃなくてログなの？」

という妹の問いに、

「ログという言葉の由来は『航海日誌』なんだよ」

と答えた。

「それって、もしかして——」



妹は心なしか顔がくもっていた。

「そう。親父おやじが書いていた旅の記録のノート。

〈白黒オーケストラのログ〉っていうタイトルで」  
「やっぱり、お父さんなんだ」

認めざるを得なかった。二人の直感どおり、自分でも気づかぬうちにいつのまにか父を踏襲している。「ログ」の二文字を引き継いだのは小さな踏襲だったが、父が亡くなったあと、父が参加していた楽団——モノクローム・オーケストラで父の代わりにクラリネットを吹くようになった。

僕はそれを喜んで引き受けた。ともすれば、そうなることをどこか予感していたようにも思う。いつか、父がクラリネットを吹けなくなったときは自分がその代役をつとめる。十歳で初めてクラリネットを吹いたときからそう思っていた。

率直に言ってしまったえば、僕はいつでも父になりたかった。父がベニー・グッドマンに憧れていたように、僕は父に憧れてクラリネットを習った。

現在、モノクローム・オーケストラのメンバー

は僕以外、全員が六十五歳以上だ。七十歳を超えているメンバーもいる。演目の多くは一世紀近く前に作られたクラシックなジャズか、ジャズ風のアレンジが施されたポピュラー・ミュージックだ。彼らと演奏していると、ときどき自分が自分なのか父なのか分からなくなる。船に乗って演奏する機会こそ無くなったが、楽団は元気よく健在で、港町のジャズ・バーや定期的に催されるイベントに招よばれて演奏してきた。

メンバーはどんなときも冗談を飛ばし合い、ときに冗談を飛び越えて、辛辣しんらつな言葉をこちらに投げかけてくる。

「そういえば、テツオ」

ベースの水越みずこしさんから練習のあとに言われたのだ。

「お前さんがこのあいだブログに書いていたハンバーガー屋な。星を四つも付けていたんで食べに行ってみただけど、ちっとも美味おいしくなかったよ。よくよく訊きいてみたら、お前さんの知り合いの店だっけ言うじゃないか。そうなのか？ それで、

採点が甘くなったのか」

「すみません、お口に合わなくて」

恐縮して頭を下げると、

「いや、あれは誰の口にも合わんだろう」

水越さんの言うとおりであった。

「二度とあんな甘い点数をつけちゃだめだ。何ごとも信用が第一なんだから」

その一件以来、〈バーガー・ログ〉は開店休業となった。それなりに閲覧者も多く、妹の直感通り、少しずつ名前を覚えてもらえるようになっていた。ラジオを始めることができたのも、〈バーガー・ログ〉がちょっとした人気を博したことが背景にあったかもしれない。

でも、水越さんの忠告は尾を引き、そのうち、本当に美味しいハンバーガーとはどんなものであるのか分からなくなっていた。

それにしても、こうして我が身を顧みると、その中心に自分の「静かな声」があるのは確かだとしても、思いのほか賑やかな声に囲まれている。

矢継ぎ早に母と妹の直感に打たれ、モノクローム・オーケストラのメンバーからは辛辣な洗礼を受けている。ぼんやりしていると、ベニーの魂が話しかけてくるし――。

それでも、毎週水曜日の深夜になると、一人でマイクに向かって〈サイレント・ラジオ〉を始める。

賑やかな声を遠ざけ、静かな時間を手もとに引き寄せて沈黙の中に身をひそめる。

首吊り男のジャケットからレコードを取り出し、息をつめてB面の三曲目に針をおろす。番組で流す音楽はすべて自分のレコード棚から選んできたものだ。あらかじめ録音しておいたものを流すのではなく、その場で本当にレコードを回している。

棚に並んだレコードには父のレコードもあった。稀に傷がついている盤まれがあり、針がとんで聴けなくなってしまうものもある。

針がとんで音がスキップするその一瞬、見えな

い何ものかが、こちらに合図を送ってきたような気がして、思わず、あたりを見まわしてしまふ。

「人生は旅だ」

父が記した航海日誌、へ白黒オーケストラの口グには何度もその一行が登場する。

では、いったい自分はいま人生の旅のどのあたりを通過しているのか。何を目印にして、どちらへ向かって進めばいいのか。

夜ふかしの皆様、今晩は——とマイクに向かって町に語りかける。

少し声が震えているかもしれない。

くつろいでお聴きください。

静かな声でお届けします。